

悲劇の風雲児

杉本苑子



ひげき ふううんじ
悲劇の風雲児

すぎもとそのこ
杉本苑子

© Sonoko Sugimoto 1994

1994年2月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-185595-6

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

悲劇の風雲児

目次

瑪瑙めのうの鳩

太子たいしの恋

影の男

野の帝王

血と恋の物語

身中の虫

火焰かえん浄土じょうど

悲劇の風雲児

解説

清原康正

276 249 211 153 127 97 81 47 7

悲劇の風雲児

瑪瑙の鳩

一

丘の上までのぼりつめると、前方にいま一つ、ほぼ同じ高さの丘が見え、平たく海が覗いた。二つの丘は、なだらかな鞍部でつながり、狐の毛皮を敷き上げたように、その上をいちめん、みじかい枯草がおおっている。前方の丘のいただきには白木の小屋が建ちかけ、作業に従事している半裸の兵士たち、それを監督、指揮している人々の動きが、小さく眺められた。

司馬康は鞍部をくだり、また、のぼって、普請場に近づいた。

「なにしにきた」

ふり返ってとがめたのは、皇后の父、丹波主君である。酒やけした赤鼻の、ぶかっような丸みが、当然、羽ふりに伴っていいはずの威厳をはなはだしく損ねている。老人がささいなことにすぐ、大声を出し、必要以上にその肥満した短軀を反らすのは、鼻による損失を、他の部分の誇張でせめて補おうとするあせりのあらわれのように見えた。

「皇子たちをさがしている」

と、康は言った。

「渚へおりた」

うるさそうにひとことで片づけたきり、丹波主君は関心を普請にもどしてしまった。ここからだ、海はさらに近い。足もとからはじまる枯草の傾斜が、ゆるやかに砂原に吞まれ、砂のひろがりはやがてそのまま、動きを停止した夕風の裾に吞まれてゆく。

砂も水も、雲母を砕いて吹きつけたかと思う眩しさの中に、ひとところ、黒く散らばる点々があつた。皇子たちにちがいない。重く、頭上にのしかかる空は、内側に茜の燃えを貼りつけた巨大な円蓋である。大気の凍てはゆるみ、そのくせ風にもならず、海ぎわは静かに暮れようとしていた。

二、三步、斜面をおりかけながら、

「だれのための家づくりか？」

司馬康はたずねた。丹波主君の背へ問いかけたつもりだが、作業している集団に何ごとか注意をあたえるのに夢中で、老人は返事もしない。

「人の住居ではない。齋宮だ」

と、代って答えたのは、かたわらに佇んでいた重臣の一人、武内宿禰だった。

「皇后に神が憑かれた。今夜ここで、神降しの密儀がいとなまれる」

丹波主君とは対照的に、武内は痩せて、背が高かった。四十を幾つも出ていない壮年にして

は、印象が暗く、老けている。あさぐろい皮膚、秀でた鼻梁……。目つきはするどく、男にしてはやや薄手なくちびるは固くひき結ばれて、めったに言葉を吐かないが、まれにそれがうごくとき、ひくい、冷ややかな、古井戸の底から吹きあがる風に似た声に、司馬康の肌の毛穴はわけもなく粒立った。

「齋宮ができるのか」

うなずき捨てて、足ばやに、彼は丘をくだりはじめた。

息長足媛皇后に神がのりうつることは、康も知っていた。裳すそを乱し、眼をつりあげ、手足をばげしく痙攣させて后が倒れる瞬間を目撃したこともある。

湯深ち、骨占い、巫女を媒体とする神問いなど、人間自身のつごうで儀式に利用されるほか、康の祖国ではとうに神秘性をなくし、形骸化してしまった信仰が、この国にはまだ、なまなましく生きている。人間は神々の支配に甘んじ、たとえば康が身をよせた大和朝廷で、その隷属民たちが彼らの首長足仲津彦を『天皇』とよぶように、各地方、各部族の民もそれぞれの首長を、神の裔、神の現身と信じて畏服していた。

人間が人間を支配する社会から、傷つき逃れてきた康にとって、この素朴さはたまらない安らぎであった。ただ、ひとびとの血のなかに、まだ多分に残っている原始の荒々しさは、祖国の王城、都市を焼きたてる焰の下で、網膜にやきつけた羯族の軍隊の狂暴、野性を思い起こさせ、康を時に、怯えさせもした。

かたまりきらない火山に似て、この東海の一島嶼ではまだ、むき出しの力が優先する。分立し

ていた幾十ともしれない小国を、大和朝廷の首長たちが数代にわたってつぎつぎに武力で併呑し、地域的な、小規模な叛乱のほかは、起こしようもないところにまで異民族を制圧して、ともあれひとつの統一国家をつくりあげている現状は、司馬康にはありがたかった。

手痛い、むざんな体験は、二十四歳にしかならない康に、老女さながら身の平穩をねがう気性を、後天的に植えつけた。

もつともそれがなくても、その容姿、挙措が典雅のように、彼の天性はおだやかだった。司馬王家の一族として晋の王宮に成長しつつあった少年時代も、武技よりは学芸にすぐれていた。絵を描き、貴石に細工をほどこすのを好んだ。

「見ぐるしい賤技だ。玉人にまかせよ」

と父が叱れば、父の眼をしのんで彫った。

王家の崩壊後はじまったながい、苦しい放浪のあいだすら、康の氣質の柔軟さは失われず、大和朝廷の内部に身をよせるようになってからも、ひとびとの輕侮を買うかわりにはその警戒を解かせ、食客とも、皇子たちの遊び相手ともつかぬ奇妙な地位を、ごくしぜんに彼にもたらしただである。

丘の傾斜を、なかばまでくだったとき、

「康だッ」

足仲津彦の二人の息子のうち、十二歳になる弟の忍熊皇子が、目ざとく見つけて波打ちぎわから、砂原をななめに駆けのぼってきた。

「康、きてごらん、おもしろいよ。膳夫^{かしわで}たちが釜^くで魚をすくっているよ」

「皇子は仮宮^{かりみや}へもどらなければならぬ。父みかどのお召しだ」

「夕食だろうか」

「用は知らない。兄皇子を呼ぶがいい」

少年の坎高いさけびが渚へとんだ。逆光を負って、籠坂皇子^{かごさか}も走ってくる。この子は十四歳だった。老人が追ってきた。傳役^{もりやく}の五十狹茅宿禰^{いさちのすくね}である。弟に告げたと同じことを、司馬康は彼らにもくり返した。

四人は丘をのぼり出した。いただきにはもう武内、丹波主君らのすがたはなく、萱^{かや}を葺^ふく兵士たちが、齋宮の屋根にむらがっているだけであつた。

「おおかた、できあがつたな」

ほんのすこし出はじめた風に、五十狹茅宿禰のまばらな白髯^{はくぜん}がそよいだ。康は訊いた。

「神おろしはいつ、はじまる？」

どういう意味か、老人は右手の人さし指を宙に立てた。

「真夜中だ」

「卿も出席するのか？」

「わたしにはその資格はない。皇后のほか、神おろしの琴を弾く天皇、審神者^{さきにわ}役の丹波主君、あと

「役々はだれがきめるのか？」

「神だ。皇后に憑かれた神が、皇后の口を通じて命じられるのだ」

「神の名は？」

「知らぬ。おそらく神おろしの場で名乗られるだろう」

康は忍熊皇子を肩車にのせ、五十狭茅宿禰は籠坂皇子の手をひいて歩いた。うごくたびに、少年二人が手くびに巻いている釧くしろの、飾りの鳩が触れ合って、シャリシャリと涼しい音を立てた。縞瑠璃しまめのみごとな塊を、足仲津彦天皇から乞うけて、彼の愛児らのために釧を作ったのは康である。丸玉、管玉くだたまをつらねたあいだに、小鳩の彫刻が七個ずつさがる精巧さを、兄も弟もがひどく珍しがり、よろこんで、片時も手くびから離さなかった。

鞍部を渡ってつぎの丘へくると、眼下いっばいに水のない海さながら、兵士らの野営のひろがりが見えた。ここ、筑紫の沖合には、季節により天候により、不知火しらぬいとよばれる怪光がゆらめくという。それを髣髴ほうふつするようにいま、大小不規則な兵士らの集団は、競って炊飯のための火を、濃くなりはじめた夕靄の底に燃やしつらねていた。

丘をおりて近づけば、しかし人間の火は猥雑だった。汗と、垢と、土ぼこりと獣皮の入りまじった匂いに、燃し木の煙がからまって、むうつと四人を押し包んだ。土にじかに、兵士らは寝そべり、放歌し、笑い、罵り合って、気まま勝手に喧騒を湧き立たせている。

彼らの統制は、あきらかにゆるんでいた。檀日かじひのこの、海ぎわに陣を張って以来、すでに六日になる。上層部の意見の対立で、軍議が二つに割れ、はるばる畿内から北九州まで旅してきながら、釘づけの日々を無為に送り迎える退屈さに、だれの表情も倦うみきっていた。

二人の皇子と、二人の傅役は、兵士どもの胴体をまたいだり水甕みずがめにつまずいたり、ぬぎ散らしてある甲冑を蹴り退けたりしながら、集団の中を進んだが、やがて行く手は、ひととき大きな人垣に塞がれてしまった。

「じゃまだ、どけ」

と、籠坂皇子がさげんだ。

「御子みこだぞッ、御子がきたぞッ」

兵士らはどつと道を開いた。

人立ちの中央に、若者が立っていた。武内宿禰の嫡男、葛城襲津彦かつらぎのそつひこである。

十六歳……。六尺を越す身長に見合つて、気性は獐猛、容貌もみにくい。およそ、その父親とは、うらはらな印象の持ちぬしだった。

畿内の自邸の庭で、襲津彦が男女のドレイ十人ほどを檻に入れて、生きながら焼き殺したうわさを、司馬康も耳にしたことがある。檻が小さく、どうにも詰めようがないとわかると、襲津彦はドレイ一人一人の手足の骨、頸、腰の関節を枯木でも折るむぞうさきで折り、自由にたためる一枚の布のようにして檻に押しこんでから、つまあげておいた薪に、おもむろに火をつけたという……。

いま、彼の前には一匹の犬がいた。体軀は、これも熊ほどある。全身の毛を逆だて、牙をむき出して襲津彦をにらんでいる。兵士五、六人が、首輪につけた綱を懸命におさえていた。

「あ、迅往とゆきだッ、おれの犬をどうするつもりだ襲津彦ッ」